

「麵麩」を離れた「天爵的貴族」

——『それから』の長井代助像考察——

梁 懿 文

夏目漱石は代表作の一つである『それから』で、当時、真似をする者が出たと言われるほど注目された主人公——長井代助を造形した。知識人の角度から代助像を考察した論文に、亀井勝一郎、高橋和巳、林圭介などの学者の論文は代表的である。亀井勝一郎は、代助の「知的生活」に着目して、中世の「隠者」伝統と関連付けて論じていた。「近代資本主義社会における隠者といふアナクロニズムに、彼の悲劇の一端があつた筈だ。」といっている。また、代助を江戸時代の「無頼漢」と照らして、「(代助は)立派な無頼漢だ。それは『天爵的な貴族』と同義語である」と指摘している。高橋和巳は近代知識人の階級的運命を掲げ、「明治の資本主義および官僚主義に対する反抗として長井代助を創り出している。その運命を破滅的な悲劇の中においたのである。」と主張している。林圭介は「知識人」へと構築されていく代助の「主体化」の過程から「知識人」とは異なる「青年」の物語を読もうとしている。代助の「天爵的貴族」という自己認識、物質と精神の

関係についての見方、職業観を考えてみると、彼は物質の欠乏の苦痛を知らないために「精神」にのみ注目していることに気づく。「精神」の重要性のみを強調して、代助は現実社会の中での立脚地を失っていく。拙論では、精神と現実との関係から、知識人代助を「天爵的貴族」、「麵麩」を離れた哲学者、物質的不安、職業にまつわる知識人の苦悩という、四つの方面から考察したい。

一、代助は「天爵的貴族」であるか

『それから』の第一章に、代助の容貌についての描写がある。

「其所で叮嚀に歯を磨いた。彼は歯並の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つた様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれは夫にも満足である。次に黒い髪を分け

た。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細く且つ初々しく、口の上を品よく蔽ふてゐる。代助は其ふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り越えてゐる。」

こういう代助について、越智治雄⁴は次のように評している。「代助は異様なまでに『肉体に誇りを置く人』であつた。感動を外部の現実世界に持ちえぬ自閉性、一種のナルシズムにそれはほかならない」。代助は、豊潤な肉体を誇りに思っているだけではなく、「自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感性性に対して払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報ひに受る不文の刑罰である」と思つて、自分の知能にも自負をもつてゐる。ここで、代助が「天爵的貴族」とまで自任することに注目したい。「天爵」という言葉は、『孟子』の中の言葉である。『孟子』「告子上」によると、「仁義忠信、樂善不倦、此天爵也；公卿大夫、此人爵也。古之人修其天爵，而人爵从之。」である。訳してみれば、「天爵」というものがあり、人爵というものがある。仁義忠信の徳を備

え、善を行なうことを楽しんで飽きることがないのが、天爵（天界での処遇）である。公卿とか大夫とか言う身分は人爵（人間界での位・身分、一時的なもの）である。昔の人は天爵を修め、自然的に人爵が従う。」という意味になる。「天爵」は天然自然の爵位であり、高尚な道徳修養を指している。徳が高いため人に尊敬され、社会的爵位があるに勝る。「天爵」の備える「仁」、「義」、「忠」、「信」の道徳は、倫理的であり、人間を相手にして始めて表せるものである。しかし、代助はこういう儒教的道徳を認めようとしない。意識的に「善」を楽しんで行くこともない。親友だつた平岡とさえ、心を開いて交際することができず、別の世界で暮らしているように付き合つてゐる。その隔たりのある関係については、こう書かれてゐる。「代助は平岡が語つたより外に、まだ何かあるに違ないと鑑定した。けれども彼はもう一步進んで飽迄其真相を研究する程の権利を有つてゐないことを自覚してゐる。又そんな好奇心を引き起すには、實際あまり都会化し過ぎてゐた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に *ni admiran* の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫驚する程の山出ではなかつた。彼の神経は斯様に陳腐な秘密を嗅いで嬉しがる様に退屈を感じてはゐなかつた。否、是より幾倍か快よい刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた。代助は平岡のそれとは殆んど縁故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化——進化の

裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐたのである。」(二)

代助はこういう風に、昔の親友と付き合いながら相手を密かに疑っている。精神的に「困憊」しており、友人の事に対して「好奇心」を失って、「自家特有の世界」を築き、その中で自分の姿を認め、外界に対する興味の喪失を「進化」とも、「退化」としても吟味している。文字通り閉ざされた自分の小天地の中で生活しているのである。「*nii admirari*」の域に達して仕舞つた「代助は、なるべく世間と没交渉でありたいため、「天爵的」美德を表す機会を自ら放棄していると思われる。だから、「天爵的貴族」と自任しているのは、実はただ一種の己惚れに過ぎないと言わざるを得ない。自己閉鎖的な代助は儒教經典の『孟子』にある「天爵」という言葉を字面的に思っているだけで、現実的にはそれを本当に理解できていないようである。むしろ、自分の都合にいいように解釈して、装飾的に使っているだけと言えよう。しかし、代助は自分の尊さを表現するために、「天爵」という言葉を選ぶこと自体は意味深い。代助は儒家道徳から次第に遠のいていくが、「天爵」が発する高貴な響きに引かれていく。

「彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雑に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、欲得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつ

た。だから凡てが美しかつた。」(十四) この「自由」と「自然」は、代助の夢見ているもので、現実社会の「道徳」、「欲得」、「利害」と対立するものだ。代助は考えている。それ故、「自由」と「自然」を手にするために代助はできるだけ現実の生活を自分の生活から排斥しようとする。排除できないから、避けようとしている。だから、後ろへ退く一方で、次第に自分の身の回りの狭い世界にしか動く空間がなくなっている。代助の周りにいる存在は、平岡や三千代といい、寺尾といい、平凡な者が多い。彼らは生活と苦闘しており、「貴族」どころではない。代助自身も毎月父から限られた生活費を貰っており、財政的自由がない。本當の貴族はそういうプライドの損じられる真似はしないであろう。だから、「天爵的貴族」は、代助の現実逃避を基礎にする「幻」の自画像であり、一種の「夢」にすぎない。

二、「麵麩」を離れた哲学者

代助は、あくまでも物質を軽蔑している。その象徴としての「麵麩(パン)」を否定している。彼が言うには、「麵麩に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麩を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。」(二) 彼の意図は物質と精神の関係にある。ドストエフスキーも言っているように、人間はパンだけによって生きていくわけではない。つまり、人間は現実生活のレベルで満足すべきではなく、精神的な追

求が必要なのである。夏目漱石は明治四十三年十月から四十四年四月まで、「朝日新聞」に掲載された『思ひ出す事など』において、ドイツの哲学者オイッケンの提唱している「精神生活」について論じている。オイッケンの理論によると、「我々は普通衣食のために働らいている」。しかし、「衣食のための仕事は消極的である。換言すると、自分の好悪撰択を許さない強制的の苦しみを含んでいる」。「いやしくも精神的に生活しようと思うなら、義務なきところに向って自ら進む積極的のもでなければならぬ。束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に営む生活でなければならぬ」。

漱石はこういう精神生活が、「現に事実となつて世の中に存在し得るや否やに至つては自から別問題である。彼オイッケン自身も純一無雑に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても明らかな話ではないか。間断なきこの種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早くすでに職業なき閑人として存在しなければならぬはずである」と言っている。

オイッケンの理論によると、高尚な生活は、職業を強く排斥するから、仕事と両立できないものである。「束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に営む生活」が可能かどうかについては、漱石は肯定的ではない。世間の「束縛」は、世間に立脚する以上は、存在しているに極まっている。「職業なき閑人」になりさえすれば、「高尚」な生活を楽しめるのか。「純一無雑に自由なる精

神生活」は架空の蜃気楼ではない。しっかりと物質的基礎がないと、それを過ごすことができないであろう。「道楽と職業」という講演の中で、漱石はこう言っている。「物質的に人の為にする分量が多ければ多い程物質的に己の為になり、精神的に己の為にすればする程物質的には己の不為になる。」この理論で解釈すると、代助は物質的には誰のためにもしていないので、物質的には何も得られないのは理の当然なことである。逆に、精神的に自分のためにしすぎるから、一層物質的に自分に不利益である。社会に背き、就職をしない代助は、武者小路実篤の言っているように、「社会に背くものは物質的に慰安を得ない」のである。

代助は部屋に百合の花の香りを漂わせ、西洋の絵を鑑賞したり、洋書を読んだり、散歩したり、ときどき上流社会の社交パーティーに出たりして、芝居に行くことや、遊園地へ行くことが好きで、享受するばかりの「貴族的」生活をしている。代助の審美的な活動は「消費的」であり、何の価値をも生産しない。彼の趣味は、百合の花などの「物質」に依存している。もしこれらのものがなくなったら、趣味もなくなる。代助のこういうオリジナルでない審美活動は、それを支える安定した物質的基礎がない上に、充実した中味がない。ゆえに、代助はだんだんとこれらの趣味に物足りなくなっていく。哲学者は、人類の知恵に示唆の火花を灯し、思想上で非常に「生産的」であるはずである。代助の趣味は、すべて「消費的」であり、「世の中が悪い」、「日本の対西

洋の關係が悪い」などという社会批判思想は断片的であり、的を射ているかもしれないが、体系的で、積極的な啓発を与えることができず、ただ悲観と厭世を催すだけである。

越智治雄は、代助の自閉した審美空間を次のように評している。「平岡の言う『現実社会に働き掛け』る形で自我の把握に遠く、自家特有の世界の中に彼は住む。その点で彼が、ブルキールの画の『下手な箇所々々を悉く塗り更へて、とうとう自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩に包囲されて、恍惚と坐つてゐるの』(中略)まさに代助の世界のありようの象徴なのである。彼は処世上の経験を軽蔑する審美家なのだ。(中略)この『生きたがる男』、『絶対に生を味わひ』たい男に、これほど美が重要なものは、もちろんそれが生の内容であるからでもあろうが、そのことがかえって端的に示すように彼の内部にある空洞、彼自身もまだ気づかぬ空洞が存在していたためではなかったか。」

自閉的で、ナルシズムに生きている代助は、平岡の言葉を借りて言えば、「たゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立して生きてゐる。」このような代助の姿は、漱石が明治四十四年に行なつた「道楽と職業」という講演で言及した「哲学者」を想起させる。「直接世間の実生活に關係の遠い方面のみ研究してゐる」哲学者は、「朝から晩まで仕事をしたり又は書齋に閉ぢ籠つて深い考に沈んだりして万事を等閑に附してゐる有様を見ると世の中にあれ程己れの爲にして

居るものはないだらうと思はずにはゐられない位」の存在である。代助は、「書齋」に閉じこもつて、「パンを離れた」根本原理を極めようとしてゐる。第八章にはこう書いてある。「代助はわざと、書齋と座敷の仕切を立て切つて、一人室のうちへ這入つた。来客に接した後しばらくは、独坐に耽るが代助の癖であつた。」平岡が尋ねていった後でも、「代助は書齋に閉ぢ籠つて一日考へに沈んでゐた」のである。「書齋」というのは、精神生活を営む部屋で、家の中で特別な空間だと思われる。代助の部屋は、洋書ばかりで、日常茶飯事の実生活と離れており、自己を現実世界から解放して、精神を自由に馳せさせる閉鎖した空間である。いつも書齋にいる代助の姿は、その自己と外界、精神と物質の關係をよく説明できると言えよう。江村洋の指摘のように、「代助が『熱い紅茶』に象徴される西洋的な生活をつづかなく送ることができ、そこになんの違和感をも覚えなくてすむのはただ自分の書齋に閉ぢ籠もつてゐる時だけなのであって、一步外へ出ようものならばこの時代の日本一般はそれほど調和のとれた矛盾のない状態にあつたわけではなかった。代助のように精神の鋭敏ではない他の登場人物たちは、そうした矛盾を矛盾とは認識しないで、あるいは認識する能力を欠いてまったく無意識のままにその日その日を暮らしている」のである。書齋は、代助にとって、調和の取れていない、矛盾に満ちた現実から離れた精神的避難所なのである。

『明鏡 国語辞典』によると、哲学とは、「世界・人間・事物などの根本原理を思索によって探求する学問。形而上学（存在論）・論理学・倫理学・美学などの部門を含む」。哲学的な代助が、形而上学に重きを置くのは当たり前のようであるが、人間存在の基本的な条件を軽視するのは、彼の「次男坊」の身分と深い関係がある。「生活苦」を嘗めたことのない彼には、糊口のために悪戦苦闘する人々の辛勞を理解しかねる。マズローの欲求五段階階説によると、人間の主な五つの欲求——生理的欲求、安全の欲求、所屬と愛の欲求、承認と尊重の欲求、自己実現の欲求は、ピラミッドのような形になっている。生理的欲求は、空気、水、食べ物など、人間が生きる上で最低限必要なものへの欲求である。代助の目指しているところは自己実現、ないし自己超越なのであろう。それは人間の欲求のピラミッドの頂きにあるもので、前の欲求が満たされてからの欲求である。食べるものに困り、生きることさえ保障されていない人には望まれない。衣食の憂いが無いブルジョア階級の代助がブルジョア階級に入り損なって生活に困っている平岡に「パン」を越えた理想を説いても、虚しい説教にか聞こえないのである。

三、物質的不安と妥協

江藤淳に指摘されているように、「代助の生活は、父の資力と世間智からする寛大さと黙認のみを其基礎としていて、それ以外

に何一つ拠るべきものを持たないのである。」しかも、代助の自分の経済的源——家との関係は、決してしっかりした関係ではない。「政略的」な結婚を断れば、家とのつながりも絶たれるというくらい脆弱な関係である。代助は心の中で、父を「幼稚だ」と密かに軽蔑し、父と相對する度毎に、「父は自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足らない愚物か」と、父の人格または知能を疑っている。こういう表裏のある人間関係は、長くつづくものとは思えない。代助自身も、父との関係に不安を常に感じているのである。その不安の殆どは、財源に生じているのである。「彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さうして其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪え得られない程度のもではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶の方が恐ろしかつた。

もし馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもう駄目である」と、代助は平生から考へてゐた。向後父の怒に触れて、万一金錢上の関係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に啣り付かなければならない。」(十三)

十五章では、代助と父との関係の望ましくない成り行きについて、以下のように形容されている。「父に対しては只薄暗い不愉快の影が頭に残つてゐた。けれども此影は近き未来に於て必ず其暗さを増してくるべき性質のものであつた。」物質的基盤を提供してくれている「パトロン」との関係が安定していない以上、い

から「哲学者」のように振舞って、高論を發する代助であつても、根本的には不安である。

代助の物質ぬきの純粹な論理は、当分のあいだ物質の問題がないから成したのである。しかし、こういう清談には、三千代が鋭く勸付くように、「ごまかし」があるのである。代助は、経済的な試練を避けているから、その理屈は、現実に程遠い、空っぽな理屈に響いている。『彼岸過迄』における「須永の話」の第十二章には、「恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である」とあり、「思い切った事の出来ずに愚図々々しているのは、何より先に結果を考えて取越苦勞をするからである」と書かれている。その「万事を等閑に附してゐる」ように見える「哲学者」は、実際は何かを恐れている。恐れることは、必然的に「不安」という結果をもたらす。

「細かな思索力」と「鋭敏な感応性」をもって「たゞ考へてゐる」代助は、考え過ぎた結果、不安になつてしまふ。代助は「平生から（心臓の）鼓動を試験する癖がある」。(七) 小説の冒頭では、椿の花の落ちる音で目覚めた代助は、ほとんど無意識的に、「右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した様に、寐ながら胸の上に手を当て、又心臓の鼓動を検し始めた。」と描かれている。心臓の鼓動にいつも気にせずいられない代助が、

不安定な心境にいることは推し量ることができよう。

代助は、何を恐れているのか。生活の表だけが見え、その裏に潜んでいる物質の強大な力が見えないけれども、その影響力を密かに感じて、おののいているのではないであらうか。「父は代助の手際で、何うする事も出来ない男であつた。代助には明らかに、それが分つてゐた。だから代助は未だ曾て父を矛盾の極端迄追ひ詰めた事がなかつた。」(九) プライドの高い代助は、厭でも生活費のために毎月父に会わなければならぬ。それは生活のために一種の妥協にちがいない。いつまでも家から生活費をもらうわけには行かないことに、代助は気づいていないわけがない。しかし、代助はその苦痛を我慢している。嫂の梅子に次のように鋭く指摘されている。「いくら偉くつても駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋と同なしですもの」。(九) 代助は自分に経済的な能力が欠けているのを、「自分でも此弱点を冥々の裡に感じてゐたのである」。「けれども夫が為めに、大いに働らいて、自から金を取らねばならぬといふ決心は決して起し得なかつた。代助は此事件を夫程重くは見てゐなかつたのである」。(七) 父への嫌悪をどこかで誤魔化して、平氣を装っている。ある意味では自己欺瞞でもある。江藤淳は、「父の目から見れば、この状態は一種の引伸された『猶予期間』にすぎず、早晚常識的なかたちで決着をつけ得る状態と考えられている。そうでなければ、父が無為に過ごしている代助を黙認するはずもないからである。」と書いて

いる。また、石原千秋の指摘があるように、代助は家において「周縁的」な存在で、「余計者」である。代助は父の積極的に画策している「政略結婚」の一枚の碁石なのである。「政略的結婚」が成立することによってもたらされる利益の中には、代助の衣食問題の解決策が含まれている。

自分の働かないことについて、代助には「正当」な理由がある。よく引用される文明批判の有名な箇所は、次ぎのところである。「何故働かないつて、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。(中略)斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は、頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、身体の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず、道德の敗退も一所に来てゐる。日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。(中略)さうして、君の所謂有の儘の世界を、有の儘で受取つて、其中僕に尤も適したものに接触を保つて満足する。進んで外の人を、此方の考へ通りにするなんて、到底出来た話ぢやありやしないもの——」(六)

これに対して三千代は「厭世の様な呑気の様な妙な」と言つ

て、「少し胡麻化して入らつしやる様」と見ている。「父を矛盾の極端迄追ひ詰め」る勇気がない、「胡麻化し」つづけている代助の批判は、確かにどこか中途半端の感じを与える。代助は「世の中が悪い」という口実を楯として自分の臆病さをごまかしている。彼と対照的に、平岡は現実には立ち向かう人間に描かれている。「僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の価値を認めるんだ。」(六)

社会に対して、代助は考えているばかりで何もせず、平岡はやたらに働き何も考えない。漱石は平岡を全く肯定的に描いているわけでもない。代助が「世の中が悪いのだ」、「日本対西洋の関係が駄目だ」などの説得力のない言い訳をつけ、自分の働かないことを「正当化」しようとしているのだとすれば、平岡は世の中すべてをありのままに受け入れ、現代の競争規則を心得、やがて代助の父と同じような人間になるであろう。

四、職業にまつわる知識人の苦惱

高橋和巳¹²は「知識人の苦惱——夏目漱石」の中で、こう述べている。「漱石にとって、資本主義は拝金主義と映っており、職業的専門人は出世主義者ないしは拝金主義への屈服者と映っていた。ここでの、「屈服者」という言葉は実に意味深い。「屈服」

という一語の反映した圧迫感のある人間関係は、「十一」でこう描かれている。「穏やかに人の目に着かない服装をして、乞食の如く、何物をか求めつゝ、人の市をうろついで歩くだらう」。「屈服」することには「恥辱」の感情がつきものである。こういう恥辱感への憎悪は、代助を就職から遠ざける。浜野京子¹³はこう述べている。「麵麩に関係した経験は劣等であり、精神の墮落を来すと常々考えていた代助には、そう容易に降参して麵麩の為に働くことなど出来はしない」。「降参」という言葉は、「敵対」の関係が存在するというのが前提になっているのである。代助が「敵」としているのは、父をはじめとする「強権」のある「世の中」である。こういう強敵に「麵麩」を乞う、ということは、代助にとって莫大な侮辱である。皮肉なことに、代助はその侮辱を免れることができない。父から毎月お金を貰うことはその証明である。ただし、代助は無意識的に出来る限りその侮辱を最小限度に抑えて生きていこうとしている。

そうはいくものの、代助の職業観を現実に合わないとして一切否定すべきであろうか。その中には、積極的なもの、あるいは将来性に富んだ示唆が含まれているのかもしれない。高橋和巳にこういう見解がある。

「漱石にとって、いや、作中の長井代助にとっては、職業なるものは、そもそも真の生活の敵であり、真の職業は食うためにはなく、衣食に不自由のない者が、〈もの好き〉にやるものでな

ければならないものだった。この職業観は遙かな未来の理想としては示唆に富み、たぶん神の觀念を媒介せずに、文字通りの天職職業観を徹底すれば、こうなるわけであろう。」高橋氏が示しているように、「天職職業観」の到来するのは、遙かな未来である。明治時代の日本において、こういう「職業観」をもっている代助の思想は、時代を超えている。

代助の仕事に抵抗する姿は、「不機嫌」な時代の社会でねじくれている人の悩みの具現である。作者の漱石自身にも、日記や講演を辿ってみれば、知識人としての苦渋がありありと現れている。夏目漱石は明治三十九年十月二十六日に鈴木三重吉に宛てた書簡の中でこう書いている。「吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、いやなものでも一切避けぬ、否進んでその内へ飛び込まなければ何にも出来ぬという事である。

ただきれいにうつくしく暮らす、即ち詩人的にくらすという事は生活の意義の何分一か知らぬがやはり極めて僅少な部分かと思う。で『草枕』のような主人公ではいけない。あれもいいがやはり今の世界に生存して自分のよい所を通そうとするにはどうしてもイブセン流にでなくてはいけない。」

「一切避けぬ」、「進んでその内へ飛び込」む典型と「ただきれいにうつくしく」「詩人的に」暮らす典型として、それぞれ「平岡」と「代助」の姿が浮かんでくる。ここで漱石は前者を肯定しているのである。つまり、勇気をもってに現実にかかわろうと弟

子を励ましていたのである。

明治四十四年八月の講演「現代日本の開化」の中では、漱石は「西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である」と日本の開化の性質を説破している。西洋で三百年もかかる開化の過程を、日本人は僅か四十年間で完成させようとしていた。しかも、外界の圧迫から発生しているため、「こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。」漱石は現代日本の開化の性質と問題を鋭く穿っているが、好い解決策は見つからないままである。講演の終りには、「とにかく私の解剖した事が本当の所だとすれば我々は日本の将来というものについてどうしても悲観したくなるのであります。（中略）私には名案も何もない。ただ出来るだけ神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くが好かるうというような体裁の好いことを言うより外に仕方がない」としか言えない。

この「現代日本の開化」の講演は「それから」を世に問うた二年後になされたのである。講演の終り方は、「それから」における代助の悲観的な思想と一脈通じている。前述した鈴木三重吉宛の書簡において積極的に世の中に入るといふ考え方は雲泥の差である。

しかし、大正二年十二月十二日、漱石はまた「模倣と独立」と

いう講演を発表し、猛烈に自己に忠実に生きる決心を示している。この講演で、漱石は盲目的に模倣することに反対し、世の中の仕来りに反対して思想上の改革を図ろうとするならば、しっかりした根柢、インデペンデントの精神、明確な目安をもって、俗世の目を憚らず「強い猛烈な勇氣」で「断言し、宣言し、実行する」べきであると述べている。彼は真宗の親鸞上人とノルウェイの劇作家イブセンを例に挙げ、自分を支配する権威あつて始めて真の大改革ができるということを強調している。

以上のように漱石の考え方の変化を見てくると、社会現実を前にして漱石の消極と積極、悲観と樂觀の間を揺れ動く矛盾的な心理状態が見える。一人の知識人として転換期の社会の中で動揺する不安の心持が読み取れる。作者のこのような心情は、その作った主人公にも現れているのであろう。

代助の場合は、その持て余されているエネルギーは、社会に向かって爆発するのではなく、恋愛の方へ仕向けられた。それが代助にとって「猛烈に生きる」の意味なのであろう。彼は社会問題をいろいろ見ているが、自己を支える「非常に強い根柢のある」思想をもっていない。しっかりした理想と信仰がない。すなわち、自己を支配する権威がないから、社会現実を変えるのに積極的に努力できず、結局、悲劇的な運命に陥っていくのである。社会が好い方向へ変わるように積極的な行動を一つも取っていない、ただ傍観者の姿で眺めている代助の姿には、作者夏目漱石の、一

人の知識人として、強大な現実の前で自分の無力さによる悲観も反映されている。現実社会の前で、悲観しながら、積極的生活をしようとする漱石の矛盾、沈淪と奮起の間でもがく漱石の苦痛は、代助に託されている。

金剛石は欲しいが、お腹のすいたときには、馬鈴薯のほうが役に立つ。「自由たる精神生活」は、高値のものなのである。「厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に噛り付かなければならない」のは、一人の長井代助のみではなく、殆ど凡ての「自由なる精神生活」に憧れる知識人の対面せざるを得ない窮境ではないであろうか。

長井代助は高等教育を受けた一人の知識人として、高尚な趣味を持っている。彼は「純一無雑な自由なる精神生活」を求めている。しかし、経済上の不安定さは、彼の精神生活を完全に自由にさせない。経済上の依存性は、彼の社会批判を空虚で中途半端なものにしている。代助には、「現代日本の開花」で語られているような作者漱石の社会現実の前での無力さも反映されているのである。

注

- 1 亀井勝一郎「長井代助——現代文学にあらはれた知識人の肖像」『夏目漱石作品論集 第六巻』太田登、木股知史、萬田務 編 桜楓社 一九九五年四月

- 2 高橋和巳「知識人の苦悩——夏目漱石」 同一
- 3 林 圭介〈知〉の神話—夏目漱石「それから」論 『成城国文学』第十六号、二〇〇〇年三月
- 4 越智治雄「それから」論 『漱石私論』角川書店 昭和四十六年六月
- 5 武者小路実篤「それから」に就て『白樺』創刊号 明治四十四年四月
- 6 同四
- 7 江村洋「作品にあらわれた漱石の日本近代化観——それから」を中心として——『講座 夏目漱石 第四巻 漱石の時代と社会』有斐閣 昭和五十七年二月
- 8 『明鏡 国語辞典』北原保雄 編 大修館書店 二〇〇三年十二月
- 9 江藤淳「それから」と『心』『講座 夏目漱石 第三巻 漱石の作品(下)』有斐閣 昭和五十七年十二月
- 10 同九
- 11 石原千秋「反家族小説としての「それから」」同一
- 12 同二
- 13 浜野京子「自然の愛」の両儀性——「それから」における〈花〉の問題——」同七

梁 懿文(りょういぶん)

山東大学外国語学院ポスドク・山東大学東北亜学院
専任講師